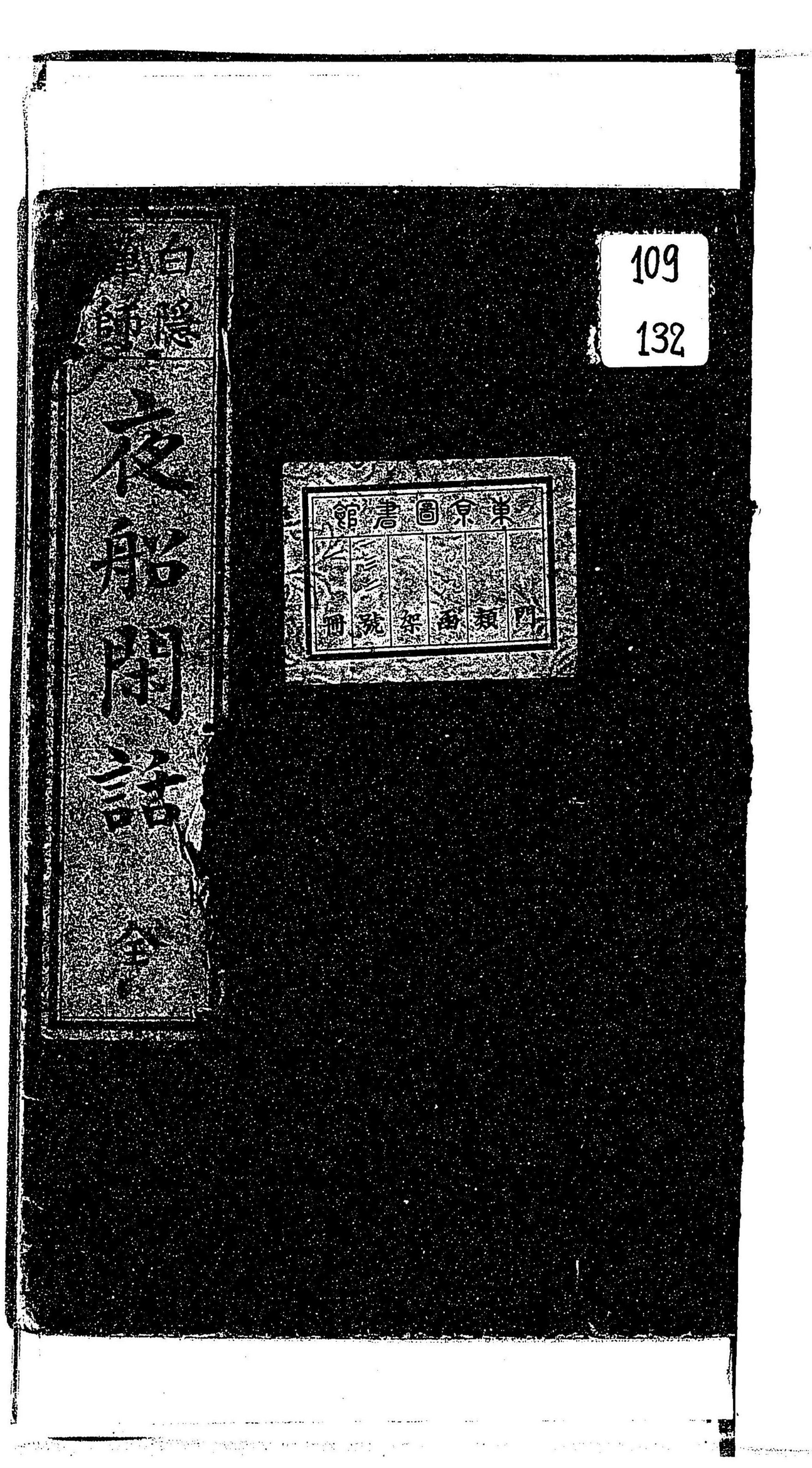

019866-000-3

109-132

夜船閑話

慧鶴／著

M19. 12

ABG-0698

明治十九季十二月刻成

白隱禪師

夜船閑話

京都書林 文錘堂

夜船閑話序

窮乏菴主饑凍選

寛暦丁丑の春長安の書肆松月堂伊の亦とりや閑へし遠く草書に裁して五にゞ鵠林近侍の尤右小寄せそ云く弘して業は老師乃古紙堆中夜船閑話とゝや云へは草稿あり書中多く乳父錬つと精父養ひ人の嘗備として充〳〵わ考ゝ長はを久視の秘訣父聚む

夜船閑話序

窮乏菴主饑凍選

寛暦丁丑の春長安の書肆松月堂伝の素とうを閲へし遠く東都に送りて鵠林近侍の尤右京寄せ来て業内老師乃古紙堆中夜船閑話とゝ云へる草稿あり書中多く氣分錬つて精分養ひ人の管衛として充〻わ当り長生久視の秘訣分聚む

渡邊亨遺書

謂ゆる神化鍊丹の至要ありと是故に在の
好友の君子を尋ねおのゝ友荒早の雲霓孔
此し偶く雲水の徒倡竊に仿写し来て
わるも秘宝し孤藏して人に示さゞれ
天瓢むなしく櫃におさめて匿しるが如し
預くゝ是を梓に壽がゝしていて世獨を歴
せん図く老師常小人を利せるを以て老後
を楽しみのゝと若丈人に利わゝ師豈

に是を吝しみのらんやと二虎含み来て師の室
を師徴くして若ゝ出小おそ猪子書櫃
を図けば草稿蠹魚の腹中に藏らる者中紫
小ゝより猪子師ち訂正傳写して既に十来
紙を見ば師ち封裝して京師に寄せん
とに不が馬歯一日も怠子小長ゝ為を以て
端中を書せん友を責む予も亦辞せしして
世に云く師鶴林に位する事大凡四十年鉢

囊に掛けしより以来雲水參玄の布衲子縱
ひ門圃に跨ぎ入師の毒涎を耳ふひ痛棒に
濕しと雖も辭し去る夏と雖も者或は十年或は
二十年鶴林下の塵と共に未だ嘗て顧みざる
底あるも盡く見義林の頸角四方の精英より
各く西東入に集り乃ち其分を盡す舊舍廢完
老院破廟借て以て菴居のまゝとして清苦を
朝艱暮辛晝餐夜凍只投ずる者は菜葉

麦麩耳に觸るゝ者は熱喝坑罵骨に徹する
者は嗔拳痛棒見る者顙を攢め因者肌
汗を鬼神も為ゝ涙を流し法爾く魔外も
為ゝ業に合せ門〻ゝ初め來る時は宋玉
河晏が美貌あるも肌膚光澤凝ずる膏乃
ち枯槁する者も久しくして恰も杜甫賈嶋
の形容枯槁顏色憔悴するが如く或は屋子に
澤時に逢へざしし參玄軀命に顧さず底

の勇猛の上士にわ〳〵ざるようんべ伯の楽しみ
有て〻汗出し湯泊をる度を得んや是故に
仕くに参窮度なたるを情若節を失する族
い脉全いつゝみかしゝ水分枯渇して疝癖塊
痛雑治の重症公發せんとした是公爆み是
を愁ゝく所ゝ縁の色みる者連日たち思俊
不禁にして雲頸を按下して婆の奥乳を
絞りて見に授るゝ内観の秘訣公ひて乃ひ

ゝく若是参禅辯道の工士心火逆上して身心労
疲して五内調和せざる事あるゝんに鍼灸薬乃
こゝは公ひて是公治せんと欲せば徑ひ義陀扁
金ゝと言へゝも輙く救ひ得る事能はゝて亦又
他人還丹の秘訣あり係る業ゝゝ鍼小是公
修せよ亦功公見るる夏雲霧を拔ひて殷日公
見るゞめんん若しゝ秘要を修せんと欲せば
且ゝく工夫を施下して結頸を拈放しゝく先

須臾く熟睡一覺をえて忽ち眠りより汝
くて眼を合ざるに前に向く長く去脚次
展べ強く踏て身の元を立て脚
輪氣海丹田腰脚足心の力不充しめ時く
に世親を以て忽に亦此の氣海丹田腰脚足
心徳に足て亦力本来の面目仏の鼻孔ある
亦此の氣海丹田徳に足て亦力分の家郷
くに仏の消息ある亦力此の氣海丹田徳不

是亦力性心の塵仏の莊嚴ある亦力此の
氣海丹田徳に足て亦力已身の弥陀仏の
法仏の線くと却返て常に形くのぬく
妄想をべて妄想の功果つりべ一身の元氣
ゆ腰脚足心の力不充足て脚下軟
抜て度ゆて藤おちざる綱のぬきん
徳塵に早くに妄想おちて六日七月至
二三七日仏經て心に従前の人様に黎家

愛弟假名の諸症底を拂て平癒せざるは
なく傷寒頭を切て水もらさにおいて結子秘法
化して家々に結候を名く悉く治驗
の奇功を見る功の遲速に進候は結條に依
といへども大は結人全快に名く内親の奇功を
續漢先生体まじく師の曰く体の軍に病全快
をもてなく完せるを変かるを轉〻治
せは轉く參ぜよ轉く悟〻ば轉く進め老傷

初め參学の時雜治の重病を發して七生憂
苦諸子小十倍せり進退維谷はる所を知ひ
そく小思惟をくくせて此憂愁に沈むん
よりは如くにて出華嚢を捨んは
とおの幸ぞや此の内親の秘訣伝はくく
金快と傳る事人の結子乃如き至人のごく
此に見神仙長生を不死の神術なり中下は世
壽二百歳なる者一を除は対を定む

らば乎則ち歓喜小徒へと雖修意ざる者
大元二年心身に乎に健康小氣力に乎小勇
壮なる変を貫て此において市称て仏と竊
に小謂へらく徒ひ壮志を修し得て彭祖
が八百の歳時を保ち得ると雖是一箇頑愚
会者の守屍鬼のごくのと老耄の舊窠小
睡るが如し終小壊滅に帰せんのみ敬で今祝
に獨りとも葛洪幾揚張業費張が輩ら小

見ばかりに弘の大誓を憤起し菩薩の
威儀を学び乎小大法施を行し虚空小先
いて死せば虚空に後として生ざる底の不
退堅固の真法身小歩殺し金剛不壊乃
大仏身を成就せんと仕において主へ正参
主の上士去二家小ばかく内親と参禅と共
に会者並べ貯て且つ耕へし且つ戦へ去
盡し茲に二十年を一負を添へ二扇

と増し傳く人今既に二百衆に迫らしを中乃
方来の神子労屬疫倦の族〳〵或は公遊
上一正に發程せんとする底を嫌み寒ろに
此内親の至要公伺授し立所に快癒せし
め轉〻惜まは特〻進献し馬年と衆古稀
に越へしらと雖ども此頃の病患ふく歯
牙全く揺落せし眼耳次第に分明しく
初めもれへ靉靆を忘る毎月毎度乃法施

猶に怠倦せし猶に伝方に應じて二百人百乃
海衆と衆會して或は人旬七旬を経不緑に
雲水の不望不期〻く胡祝乱乃ときも大九
人〻十會に及ぶと雖ども終に一日も罷編
斎公損ぜし身公健康者力は次第不二三
十歳の時より遥に勝さまり是は彼の内
親の奇功に依る事公費人位菴の諸子名
く悲泣化祈して云く吾が師大慈大悲願

くは内観の大要なる書せよと書して曰わく故
末禅病疲惓者が常の心を著して救へ師所ち
領とする所に系称なる称中伝の説くこゝろを
曰く大乗なる長寿なる保門の要形なる
練るに志して形なる錬るの要神気なるしく
丹田気海の所に凝らしむるにあり神凝る
則へ気聚るこゝろる則へ所ら真丹なる丹来る
則へ気固し気固さ則へ神全し神全さ則へ

まのこゝ是仏人九特還丹の秘訣に契一つも須
らく知るべし丹に呆して外なる非ざる事
を知萬唯心なる降下し気海丹田乃至
元しむる不有るこゝのを位養の緒子此
仏要なる勤めくをげみ進んで怠ることん禅
病を治し労疲を救へのこにあるべし禅門向
上の変に到て年来疑團あるむ人いたひ
なる拘して大変なる底の大歓喜有るむ

仏の故で月うして塔教書く

旃時寳暦丁丑孟正廿八黄

窮乏菴主飢凍炷香稽首

夜船閑話

山所初め参学の日誓願して勇猛の信心を憤發し不退の道情公激起し精錬刻苦とは者既小丈二寸作ち一夜忽然として落第と従来多少の疑惑根よ和しく氷融し瞬知は死の業根底小微して滅と自〻親〻く道ち人人を去る支遠に遠うして

古人二三十年見仏の捏怪そと怙悦弱棄公

忘れ者数月向ふ日用を廻顧せるに初静の二境全く調和せざるを覚乃ち逸絶す脱洒なるべし自ら謂らく稽く精彩を着ぬ重て一回捨命し去んや紙ひて牙関を咬定し雙眼睛を瞪目し寢食忘れんとを既にして未だ朝月小互ごろ小心少逆上し肺金焦枯して雙脚氷窖の底に沒せるが如く舌耳漢聲の呂に仏仏くぐ肝膽乃に

怯弱ふして衆指忍怖多く仏神困倦し寐寢憧くの境界に見ず舌腹乃に汗出し舌眼乃に涙を帯び出おいて遍く明師に投し廣く名聲に揮ると云へども百薬効ふし或人曰く城の白河乃ち山裏に巖居せる者あり在人是を名て白髭先生と云人霊寿二尼甲子に関し一人居三尼星程を蒲法人を見ず好ぶ仏仏別は

必ずと為て避くべし人を賢愚を辨ずるなし
聖人尊び称して仏人と呼ぶ故の丈山氏
の師範すべて精く大文に通じ深く醫道
に達せり人あり経を戸して答問する明い稀
なり
也に微言を吐く迫ひて足と考ふ大ひに
人に利あるべし
孟正中流霧の行纏に着け濃霧に發し
思谷に対へ直ちに白川の邑に到る包を案

庵にお訪して曲の巖栖の奇を尋ね聖人遥か
に一枝の溪水に指を弄ち彼の多摩に流て
遥かに山溪に入り正に行く支度でなる小作
ち流れに踊断を樵径も埋まる一時り一
を丈あり遥に雲煙の間に指を黄白の
て方寸餘の着あり山氣に流て或は飛び
或は隠る見曲の洞に至下をる示の蘆簾
をりと吊ち雲を裳げて上に峰巖に踊

み蒙茸を拔けば氷雪草鞋を咬て雲露衲衣を靡て辛汗を滴し苦膏を流して漸く彼の草屋のもとに到る其風致清絶実に西園戰栗に日々巖根に倚て數息する者數百少年あり衣を振ひ襟を正しく畏ぎ鞠躬して蘆子の中なるを膝曉として齒を收て端坐するなる蒼髮垂て膝に到る朱顏縹々として素の如し大布乃袍を掛け輭草の席に坐すし窟中繞らに方丈なる物なして全く資生具なし机上只中庸と老子と金剛般若とを置く予則ち禮を盡して苦るゝ病因を告げ且つ救ひを請へば少年齒眼を開ひて熟々視て徐ろして告げて曰く汝は是れ中道の乱の漢人櫨栗を拾ひ食ひ麋鹿に伴はく睡りけ

外更に他なし知らんや自らに愧じ遠く上人の
末学なる支を予が打轉咨叩しく
体ゆゑ時に歯悟めして予が投ぜへて精
しく五内を窺ひ九候を察し九甲長生の
寸修平として顔を攢めて云く已成観理
度に過ぎ進修希に失して終に世の重症に
発を美に醫治し難に著へ公の禪病すり
若し鍼灸藥のこいの乃あり時んで而して後

に足を救うんと欲せんは扁倉力を竭くし華陀
顔を攢むるも吾功を見ず支離へ之今既
に観理のあるに彼ら活動して内観の功を積ま
どんで終に起は支離へ是の起倒は必
らず地に依るの謂なり予が曰く預くる内
観の要秘を学んぶ学びて小足を修せん
歯束して容あり従容として
若て曰く何ぞその必ずは同じを好むの士

まりて家々昔し因けるを以て微しく公り
告んと是養生の秘訣なれ人の知る事稀
なるを以て人々必ず奇功を見久視久
朝しをべし夫大道分明なるを以て陰陽
交和して人物生ず先天の元氣中間に默運
して五臓列して經脈行る衛氣營血互に昇
降循環する者晝夜に大凡五十度肺金は牝
藏ふして膈上に浮び肝木は牡藏ふして膈

下に沈ぶむ心火は大陽ふして上部に位ひし
腎水は大陰にして下部を占む又腎ふ七神あり
脾腎各々二神ふ藏くを呼ふ心肺より出て
吸ふ腎肝に入る一呼ふ脉の行く度二寸一吸に
脉乃行く度二寸晝夜に一萬三千五百の氣
息あり脉一身を巡行する事五十次火は輕
浮にして水は沈重ふして
常ふ下流ふ務む若人察せざ觀照或は常

を失し志念或は度にあらざれは心火熾衝し
て脉金衰薄を金母苦らしむ則ち水子衰減
を母子互に疲傷して五位困倦し六属凌奪
し四大増損して各く百一乃病分生し百藥
功を立てる支離いなを衆醫徒にあつ束手
て終に治ることなきに到る蓋し生分害分人
国公なるかゆへ明君聖主不分下なる
ふし賢君庸主に分上ふ恣にし上り

恣ふしてる則ち九卿権に袴つと百僚冪を恃んで多
て民の窮困を顧ることなし邪ふ某色多く
国綱紊乱し賢良潰み竄さ民瞋を恨む
諸侯離心叛逆衆嬢ひ起りて後ふ民度を
塗炭にし國脉永く断絶せふ到ふ分分
下に乖ふしてる則ち九卿信分なるを百僚紛を
動めて考ふ民の労疲を云ふ多し農
に餘はんの粟わり婦ふ餘はんの布有く群

賢に来り属し諸侯恐れて服して民肥し國強く
今に遂せるの恐民なく憍ひて侵すの敵國
なし國力升の如く安く安く民戈戟乃
名公名〻〻人身も病を待て至人に学び
血氣なしして下に考へむ心氣下に充ちる
則ち七竅内に初く安く邪病外より
窺ふの紙ぶ管衛充ち心神健なるのち
絶小藥餌の耳鍼灸の身絶に鍼灸の

痛痒を受けど庸流は必ず治して上に
恐ふと上小恐にとる則ち左すの火右すの金を
尅して五官徧ねり病と六親苦るしみ根む
足故に漆園曰く真人の息は足を息とするに
踵をいてし衆人の息ふ足ふ息とる小喉を
いてに許後が云く嘉一家下焦に在る則ち
主息遠く氣上焦に有る則ち主息促ぬる
上陽子が曰く人に真一の氣有り丹田乃中

に降下する則ち一陽陰を侵すを若人姤陽初復の候なり和むと雖も猶ほ暖氣なれども氣なれども信と雖も大凡生なるの乃上部は常に清涼なれども支を要し下部は寒冷溫暖なら支なれども要せよ支經脉の十二月支の十二に配し月の十二に應じ時の十二に合し六爻變化再周して一歳を全くするが如し五陰上に居し一陽下を占む是を地雷復と云ふ

冬至の候なり直人の息は足なれども息を踵を以てするの謂なり三陽下に位ひし三陰上に居し足を地天泰と云ふ孟正の候なり萬物發生の氣を含んで百卉喜化の澤を受く至人元を養ひて下に充さしむるの象人是を得ば則ち營衛充実し氣力壮なり五陰下に居し一陽上に止まる是なり地剥と云ふ九月の候なり天是なれども得る則ち林莽色なく冬に百

并荒落を是衆人の息を息とする小喉を
いてとるの象人是を得る則ち形容枯槁し
歯牙揺り落ち所以延壽書に云く六陽
共に盡く則是全陰の人死易し須らく
知べし元氣を養して常に不充しむ是生
を養ふの樞要なるを昔し巽契初石室
先生小見の齋戒して錬丹の術を宮人先
生の云く永く元玄真丹の神秘あり上古の

器にあらざるよりんん得ざる伝ん古人
黄朱子是を以て黄帝に伝ん帝三七齋戒して
是を受く是大道の外小真丹乃外
小大道なし盍し五無漏の法あり体ちの六欲
去ち五官各く其職を忘る則ち混然たる本源
の真氣仿佛として目前に充ち是彼乃大白
道人の謂ゆる我が大を以て変化不の大小合
まる者なり孟軻氏の謂ゆる浩然の氣を

ひとしいて脇輪氣海丹田の間小藏めて歳月久
敷を経て足なれを守一小一去つて見る人者く多
適ふ一去て一朝たち丹竈を撥凝をる則は
内外中万八紘四維総是一枚の大還丹は時小
齒く初て自己所ち見る天地に充てせざに
方寸にはなとく死せざる底の真箇長生久
視の大神仙をるものを貴得せん見を真正丹
竈功成る底の時分とに豈に風小御一霞

小跨ぐ地公編ち水を踊む等の鎖来る幻変
公いて懐とをる者うんや大深公攬ひく酥
酪と一厚土公変じて黄金とに為賢曰く丹
は丹田ゆり液い脳液ゆり脳液をいく丹田り
還へに足故に金液還丹といへ予曰く確ん
で金公因いは旦〳〵く禪観公抛下一努力
めて治をる公いて期とせん為る〳〵ものを事士戈が
渭ゆる清降に編さる者にあ〳〵ぞやん公一

之を分割せば家血或ひは滯礙する変なるべむ
歯微〻として笑て云く然〻に李氏いへるやう
火の性は炎上するり宜しく是分下〻しむ
べし水の性は下るに就く宜しく之分
して上〻しむべし水上つて火下り是分名けて
交と云へ交ら則ち既濟と云ひ交らざら則ち
未濟と云ふ交はせの象不交の象あり
李家が謂ゆる清降に偏あり丹溪分

学ぶ者の弊分救ふんとして古人云く相火上る
易き人身中の苦しむ不足分補へ火分制
する法以て血〻火に君相の二義あり君
火上に居して静を主さどり相火は下に
して動分を司さどる君火は是一心乃主なり
相火は宰輔なり血〻相火に支配あり猶
ゆ肾と肝とするり肝は雷に比し肾は龍に
比す是故に云へ龍をして海底に帰せしめ

必ずや迅雷の雷あるが如く澤中に
藏すれば必ず飛騰の龍あるが海澤の水よ
あるごとく変化測り是相火上り易きが制
せるの法にあるべやまた曰く心労火を動る則は
虚して心熱に心虚を動る則は是を補ふが
如く下ゆえに腎に交じり是が補とすべし阮
海の道あり公先小心火逆上して世童病が
發に若し如く降下せざれば眩ひ二眼乃

秘密が行し盡しうる起門半ば過ぎ且つ又
家ら歌と模道家者法に熟せるが以て大ひに
繁に昊うる者とせるは是禪かつて他日ま發せ
いたひ小昊は多くの喜有りむ丈觀い五親が
以て正親とし又多親乃ち邪親とし向さよ
公多親を以て世童症が見ず今是が救へに
五親を以てに陰と可うるごとや公若し心炎
意火と收めて丹田及び昊なのるが如おば胸

臘自然に清涼にして一點の計較心想なく一滴の識浪情波なくして真觀清淨觀なるを云へ変なりと云ども禪觀に拔下せんと佛の言へる如くに只おさめて絶く百一乃病に治すと阿含に酥に用ゆの法あり乃めに病因に編ずる変甚だ盡せり治法に説く変も亦甚だ精密なり十二種の息あるもよく

元病に治に脚輪に縁して変に見る乃法ありて大に心に降下して丹田及び足に収るに止て主要とす但病に治するの示あり

ぜに大に禪觀に助をく盡一繫緣締三の二止あるを締三の實相の圓觀繫緣は如氣を脚輪に丹田の下に収め守るに止く第一

永平の開祖師大宋に入て此法を天童に

あに師一日密室に入て益公禅人に謂曰く元子生禅の時さんぬ方の掌の上にねくだ〻と見給ふ顕師の謂はく内繫縁止の大器なり顕師初め世の繫縁内観の秘訣を教へて生家兄鎮情が重病を萬死の中に助け救ひ法華経を説くに精しくは小止観の中に説けり

白雲和尚曰く孫にんをして臍子の中に充〻む徒公匡〻衆公領〻賓公接〻

横に意じ及び小参晋祝七縦八横の号小おい〻見公用ひて法〻る事か〻老末孫に利益多き支公費〻と寔に甚だ〻足盍〻素問て みゆ内情澹虚無そ真氣足に志〻人精神内に守〻び病何を〻る事〻むと い〻人秘に本づ〻の〻者ゆ〻むら且つ支内に守るの要元氣をして一身の中に充塞せ〻免二百六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髪だらも

欠缺のごとくしりん来る要にこれなく
者へ至要なるべし彭祖曰く和神
導気の法當に深く密室に鎖ざし牀に
案ず席に煖め枕のるるさ二寸半正身偃臥
し瞑目して心気胸膈の中に閉ざし鴻毛に
いて鼻上につきて動ごかざるべし二百息に経く
耳聞えずして目見えずして形のぬくもり
則ち寒暑も侵ること能はず能はば蜂蠆も毒する

事能はば壽を二百六十歳是真人にをらーと
又穎川翁曰く已に飢へて方に食へ未だ飽ざ
して先止む散歩遥遥して務めて腹をして空
ならしめ腹の空るる時に當て即ち静室に入
り端坐瞑想して出入の息を数へよ一息より
かぞへて十に到り十より数へて百に至り百か
数へ終ら至て心に至て此身兀然として
心寂然たる事虚空と等し形骸ごとく

あるひとゝして一息おのづゝ止まる出でゝ入らざる時は息八萬四千の毛竅の中より雲蒸霧起はじめて六塵初来れ諸病自ら除こり諸障自然に除滅するを明眼せん譬へば盲人の忽然として眼を開くが如ちん此時人に教へて路頭を指さゝ支分ひゝ民示を見ずして分別を省略して爾ち乃元氣を長養せん事分見故に云人目力分養の者は常に瞑目耳根分養の者は乃に飽さん事分養分者は乃不默ゝと予が曰く酥分用るの法はそれひいでゝ牛乳曰く行者定中四大調和せゞ身心ともに労疲なる支を覚せゞ知分起して應さ小出想分分さゝゝ譬へば色香清浄の蘇蘇鴨卵の大ひさのごとくなる者頂上に頓生せんに其氣味微妙ふしく遍く頭顱のうちを洗ゝ潤

下し才くく去月及び雙臂及乳胸膈乃乃
肺肝腸胃脊梁膂骨次第に沾注し將ち
去る時に當て胸中の人横六家疝癖塊痛
仏不隨て降下とる事氷の下に注くごとく
歴くくして聲あり遍身仏周流し雙脚と
溫涅し呉仏に至くれち止む行者再び慥
さ小此觀仏成とべし波の浸くくして涸ト
とる不の條流積りて港へて暖お離に出テ

恰も在の良醫の檀くく勅香の茶物を集め是
仏薬湯して浴盤の中に盛て港へて赤ゞ脚
猶已下仏漬け薬に浸め此觀仏成とた
唯仏所現の故に鼻根左ち希有の香氣仏
宇ごと身根俄ク小勅好の輭觸仏安く身心調
適うるの二三十歳の時丸遍ち脚とり此
時小當く横聚仏消融し腸胃仏調和し覺
へ肌膚光澤仏生に若て動めく左くごとん

べからざるの病を治せざるむかしの法を遠ふはなさしん
かるとの仏成せざるかかるとの道を成ぜざるを切
結の遅速に行人の進修乃精粗に依からく
のこと走馬の卑家の時多病にして公の患ひに
十倍したる衆醫徒に顧みざるを到る百端が
窮むといへども救ふべきの術なしにおいて
上下の祇祇に祈てこれの冥助を請ひ願へ
かのなやみぞを針しぶもこの頼酥乃紗術が

傳受をとる変化歓喜に堪へぬ綿々として精
脈を未だ朝月をへざるに衆病大半消除に
爾来身心軽安なる変化覺ゆるのこと癡し兀
〻月の大小を記ずに年の閏餘を知ずに在念
に茅に輕微にして人歌の高なるもいかんを
とるべかし馬年今歳かの十家なるものもはと
知ずに中に端中なるく若卅のこと中に潰道を
内者大九三十歳在人都て都ら来かし三中

月が顧るに怪しき黄粱半熟の一夢はゝ今
此山中主人の妻に向て此枯杨の一具骨が故
て太布の單衣綿なに二三片を掛け嚴冬の寒
威綿が折くの夜とゝ人ども枯腸を凍損をる
にて〳〵ゞ山粒をぞに断へて穀氣が受けざ
る事數日に及ぶとゝ人ども終り
凍餒の覺へもあれ半(若此親のカラ)ずや
永今既に公に告るに一せ月ゝ盡さぬ底の

秘訣がいてに此外文にはが今ちんやと云て月が
収ちて孤中に弔丸赤こ海が含んで禮辞に
徐〳〵して洞口がいとゞ木末綿なに孤陽と
掛く時小殿堂の下〳〵して山谷小谷〳〵侍
ある〳〵具ッ驚き具ッ怪んで畏ぢく四顧するとゞ
遥に遠ぐ巖窟が離〳〵く向〳〵遥り来る人
見る所ち曰く人迹不到の山路西東分ち難
一忽く山婦容が悩せんを来たるく飯程

公導すんと云て大馬屐公着き痩杖をひさ
嶮巖公攀ぢ嶇徂公陟る事飄々として坦途
を行くが如く終に先驅して山路遥かに
里許公下て彼溪水の邊に到て行ち同く此の流水
に洗ひ下ぐば必ず白川の邑に到らむと云て
悠然として別れ且く栄立して遥か田歩
を目送するに十老歩の勇壯なる事飄然
として春公道を行く羽化して登仙と云人

の如し且つ羨み且敬ひ自恨む者公終る事なく
此等の人に陋逐なる妻妾公除くと
して帰り来て時々に彼の内親公濟修する
に繰々示こ年に云ざる小従者の衆病菜餌
を用ひ鍼灸公假くば任運に除遣に物を
病を治するのみ知らば従者を御公挾む
夏ひで歯牙公下さを事ひざる底乃雅信
雅遠雅解雅入底の一着子根に遠る底

に徹して透りて大歓喜が出る者大凡六七回を除の小悟悦躍歓喜が有る者影が
ちらばらば妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟数が知らざると初て知る寔に家が歌うざるを吉
人三三昧の襟を着くといへども足が常に氷雪の底に没にが如くうち着今既に冬
厳寒の日と云へども襟せざれば馬歯既小古稀が越へんとすれども指に凍れば墨の小

病も治まるに反へ彼の神術の除魔よりもうんの
云へ反かうと嵩林が死の疎端多少の義
荒唐の妄説を紀取して伝の上流を詐惑
さと足宿とに霊骨有て一樹に既に感ずる
底の俊流のあり小設くるにあらばば癡純子が
必く骨病子に類ひとる底看積して猶小
親察せば必に小に補ひうんの臣名別
人のまへ指して大笑せん事を伺う故で馬枯

109
132

其父咬んで午枕に喧びそ〜

明治十九年十二月三日 飜刻御届
同 年同月廿二日 刻成發兌

出版人 京都府平民 菱澤重兵衛
下京區第十四組四條通御旅町
三十七番戸